

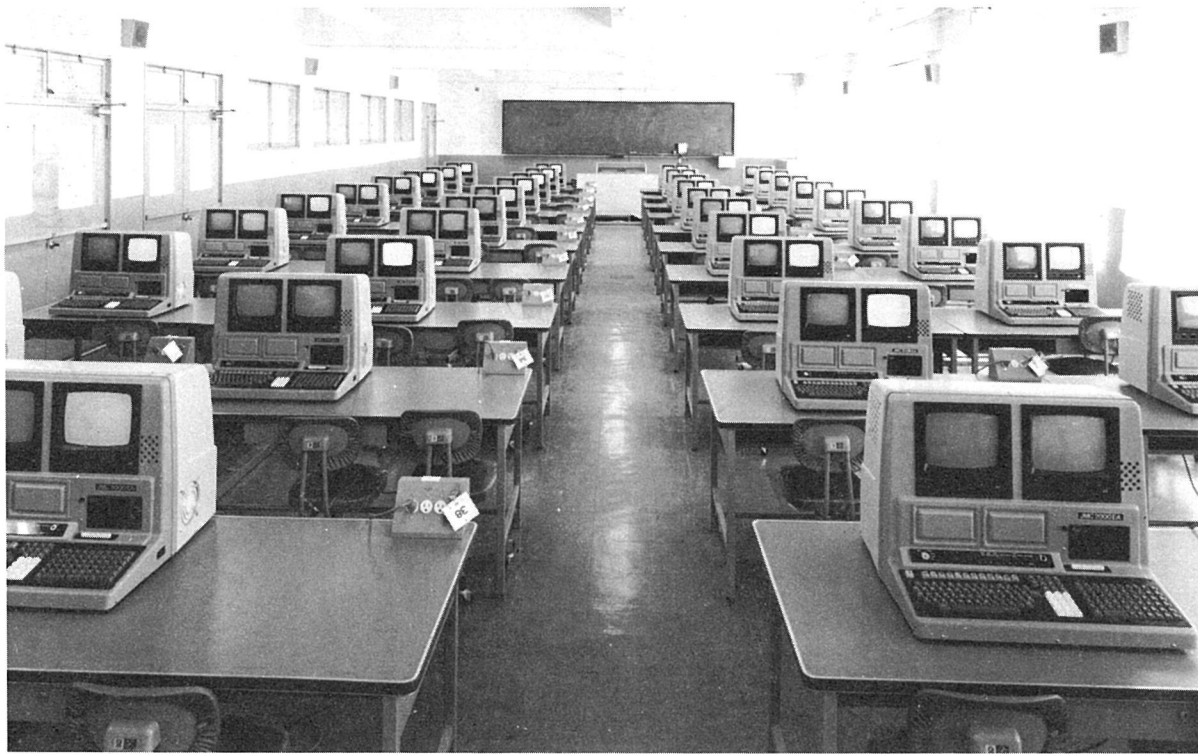


発行所 日本工業大学 広報課 埼玉県南埼玉郡宮代町 郵便番号 3445 電話 04803 (4) 4111

これからの行事予定 6/29 東工学園創立記念日 7/12-7/21 前期末試験 7/23-24 補講 7/23-9/19 夏季休暇 9/20 講義開始・履修申告 9/21 履修申告

# マイコン応用実習室が完成

## 教育、研究ならびに本学OB等への再教育に利用



本学では、工学教育上有益なものを、独自の構想で開発したマイコンコンピュータ・システムが完成した。これは、本学の廣瀬治男教務部長補佐と電気実験センターの片山茂助助手を中心に、日本マイコンコンピュータ株式会社と株式会社木村電気工業所の協力を得て開発されたもの。マイコンコンピュータ四〇台を二一教室に設置され、「マイコン応用実習室」と名称される。これによって、学生へのマイコン教育はもろもろのこと、マイコン関連研究やソフトウェアの開発などに利用されることになる。また、本学既卒者や工業高校の教員、それと地元産業界の関係者に対するサービスなども考えられている。教育用マイコンコンピュータの構想の下に開発したもので、教育システムが、二一教室に設置された。このシステムは、本学が独自の構想の下に開発したもので、教育システムが、二一教室に設置された。このシステムは、本学が独自の構想の下に開発したもので、教育システムが、二一教室に設置された。

### 重視されるマイコン技術

マイコンの誕生は、一九七一年のことになっている。その動機は、日本の電卓開発に端を発したのであるが、国内のハードの進歩はソフトウェアの弱みのために、今一つ遅れているように感じられる。しかしながら、その利用は今や爆発的に増大しつつあり、その浸透先はあらゆる方面に及び、機械装置は言うに及ばず、家庭や職場あるいは建造物や施設の中に、その形こそ隠れているが、身近なものになりつつある。また、米国の世界的な電気電子学会であるIEEEの雑誌「スタートラム」には、二〇一三年、毎号のようにマイコン関連技術の記事が掲載されている。いかにその技術が重要視され、また応用の広さが認識されているかを客観的に物語っているのである。

マイクロエレクトロニクスにおける技術革新は、まさに劇的に、容赦なく襲ってくる。電気の技術者なら、トランジスタやIC、電算機の出現などによって、既に幾度か身をもって経験してきたことである。IEEEが、生涯教育の必要性を強く訴えているのも、同会員の再教育の必要性のキヤン

工高卒の利点活かす マイコン教育 学科を問わず、学業を築き立つ者たちが、教壇を降りて技術革新の荒波に呑まれる様子は、工業教育に携わる者として、看過するに耐え難いものがある。当然、個人の能力をそこで問われるのであるが、従来からの大学は決して前向きに対処してきた訳ではない。大学の教育は、そのような個人の対応力を与える基礎を与えるものと

の彼としてのマイコン応用技術の修得が、本学の特長を一步伸ばさせることになるという考えに、吉田学長が賛意を表された。これは、次のような評価があったからである。すなわち、本学入学者のほとんどが工業高等学校を経てきており、既にある程度工業技術の下地のある学生が、マイコン応用技術を修得する優位性は、卒業後の先進性として、産業界で確たる評価を可能にし、生涯教育の発端ともなる。また、マイコン施設は既卒者や地域産業界の技術者に対して、再教育の場としても大きく寄与するとともに、学内研究にも有効な利用を期待できるものである。

54年度出身校別 入学者数 北海道 旭川工(2) 苫小牧工(1) 旭川工(1) 釧路工(2) (3) 帯広工(1) 釧路工(2) (3) 青森県 青森工(5) 五所川原工(6) 十和田工(3) 弘前工(5) むつ工(1) 野辺地工(1) (2) 釜石工(1) 福岡工(2) 水沢工(1) 宮古工(2) 盛岡工(5) 宮城県 宮城東立工(1) 石巻工(1) 白石工(4) 古川工(3) 秋田県 秋田工(2) 大館工(1) 大曲工(1) 小坂工(1) 能代工(1) 山形県 酒田工(1) 新庄工(1) 鶴岡工(2) 山形工(3) 米沢工(1) (2) 山形県 会津工(2) 喜多方工(2) 小高工(4) 勿来工(6) 郡山北工(5) 平工(4) 福島工(3) 白河農工(1) 聖光学院工(1) 茨城県 大宮工(1) 勝田工(2) 下館工(2) 総和工(4) 玉造工(4) 土浦工(5) 日立工(1) 水戸工(2) 波崎工(2) 栃木県 宇都宮工(9) 足利工(4) 今市工(2) 栃木工(6) 那須工(1) 真岡工(4) 足利学院(2) 作新学院(4) 群馬県 伊勢崎工(8) 桐生工(4) 高崎工(9) 太田工(5) 藤岡工(1) 前橋工(1) 長野県 1) 渋川市立工(4) 関東学院(1) 埼玉県 春日部工(19) 浦和工(13) 大宮工(17) 川口工(9) 川越工(9) 行田工(9) 久喜工(5) 熊谷工(14) 狭山工(3) 玉川工(3) 秩父農工(1) 越生工(1) 小松原工(1) 千葉県 市川工(11) 京葉工(3) 千葉工(3) 東総工(4) 茂原工(9) 千葉東(8) 千葉経済(3) 東京都 足立工(8) 荒川工(8) 王子工(5) 葛西工(7) 鳥山工(2) 蔵前工(5) 北豊島工(2) 小石川工(2) 江東工(2) 杉並工(2) 八王子工(2) 墨田工(4) 田無工(5) 多摩工(1) 練馬工(1) 向島工(3) 羽田工(1) 府中工(1) 本所工(8) 港工(2) 工芸(1) 関東第一(1) 昭和一(6) 豊島(4) 本郷(3) 目黒(3)

### 施設・設備

#### 図書館等増築工事完工

昭和五十三年度における施設拡張工事が一通り完成をみた。拡張工事をした場所は、図書館(三二一坪)、機械製作センター(四九五坪)、A4・構造実験棟(二〇九坪)。それに体育館北側の増築(二六九坪)も終えた。また、学生自治会さん下の体育・文化同団

#### X線マイクロアナライザーも購入

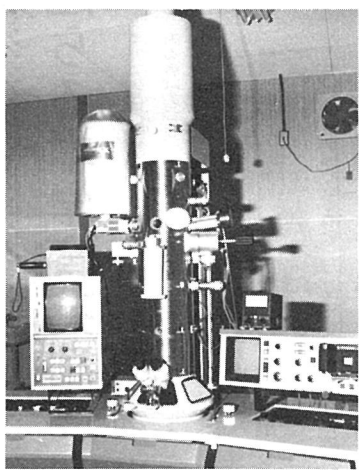
体利用するクラブハウス(二三二坪)が新築された。

一方、設備の方では、五十三年度私立大学研究設備整備費補助金により、X線マイクロアナライザー(日立微少部X線分析装置、X1700型)を購入し、E7実験棟に設置された。



### 大川陽康教務部長、学長代理 吉田学長「病気のため」

吉田学長が病氣入院中のため大川陽康機械工学科教授兼教務部長が学長代理に任命された。これは三月二十三日の理事会で正式決定した。吉田学長の病氣が回復し、現職に復帰するまでの間、大川教授が学長の事務代行を取り持つことになる。



X線マイクロアナライザー

安田学園(8) 東京電機大(3) 工芸院大(1) 神奈川県 磯子工(5) 神奈川工(4) 向の岡工(2) 川崎工(1) 藤沢工(2) 横須賀工(1) 大船工業技術(1) 小田原城北工(1) 横須賀市立工(1) 鶴見工(2) 山梨県 機山工(6) 北富士工(2) 甲府工(4) 韮崎工(4) 長野県 飯田長姫(2) 池田工(2) 上田千曲(7) 岩村田(3) 飯田工(1) 駒ヶ根工(2) 中野実(1) 長野工(2) 松本工(1) 木曾山林(1) 箕輪工(4) 信州工(1) (新潟県) 相川(1) 新発田商工(2) 柏崎工(2) 高田工(4) 長岡工(2) 新潟工(2) 新潟東工(2) 三条工(1) 燕工(2) 新潟工(1) 富山県 魚津工(1) 砺波工(1) 富山工(1) (石川県) 七尾工(1) 福井県 武生工(1) 敦賀工(5) 静岡県 掛川工(5) 静岡工(5) 島田工(1) 清水工(3) 修善寺工(7) 浜松工(1) 吉原工(2) 浜松城北工(2) 天竜林業(2) 日三島(1) 愛知県 豊橋工(1) 名古屋市立工芸(1) 名古屋工(1) 岐阜県 可児工(2) 岐阜工(2) 関西工(1) 三重県 津工(2) 四日市中央工(1) 大阪府 西野田工(1) 浪速工(1) 大鉄(1) 京都府 伏見工(2) 奈良県 吉野(2) (和歌山県) 新宮(2) 兵庫県 龍野(2) 豊岡(1) 西脇工(3) 姫路工(1) 尼崎(1) 鳥取県 境港工(3) 鳥取工(2) 岡山県 岡山工(2) 津山工(8) 水島工(1) 新見北井工(2) 倉敷工(1) 山口県 柳井工(2) 下松工(1) 広島県 広島工(4) 宮島工(3) 三次工(1) 呉港(1) 三原工(3) (香川県) 坂出工(1) 高松工芸(3) (徳島県) 貞光工(1) 徳島工(1) 鳴門工(1) 高知県 安芸工(2) 須崎工(1) (愛媛県) 吉田(2) 福岡県 福岡工(1) 佐賀県 塩田工(1) (熊本県) 水俣工(1) 八代第一(1) 大分県 日田林工(1) 鹿児島県 出水工(1) 加治木工(1) 鹿屋工(2) (沖縄県) 沖縄工(1) 北部工(3) 美里工(1)



新入生諸君、充実した学生生活を

大川陽康学長代理

「目には青葉、山ほどと季節が...」
その結果、五体がうごめいた感情にまどろみつかれるような状態をいいたるのだろうか。このように、環境や状況に適応できず、生活のリズムが狂った状態は、あなたがこの季節に陥って起ることはない。古今東西を問わず、かたちこそ違え、多くの人間がこの種の状態に陥り、思い悩み、苦しみがあつたり、自分を責め、涙を流して成長してきたことは事実である。

後援会活動、緑化運動、ただいま展開中

本学の後援会(会長 森川大成氏)は、昭和五十三年から特別事業計画の一つとして、学内の緑化運動を展開してきている。これは本学が学内教育環境整備の継事業として、学内各所に、タバコの吸い殻を入れやごみ箱を設け、学内の美化運動を開始したことに呼応して行われているもので、後援会では、緑化委員会(委員長 高木伊三男氏)を設置して、計画を運用している。五ヶ年計画(学内二十五ヶ所に、杉・いちよう・楠・つつじ・けやきなどが植樹されること)となっており、既に、五十三年度計画分は終了したが、キャンパスは一段と、潤いと落ち着いた様子を見せている。



本学の緑化運動の一環として、学内の緑化運動を展開してきている。これは本学が学内教育環境整備の継事業として、学内各所に、タバコの吸い殻を入れやごみ箱を設け、学内の美化運動を開始したことに呼応して行われているもので、後援会では、緑化委員会(委員長 高木伊三男氏)を設置して、計画を運用している。

また、後援会では、本学セミナーハウス(元山荘)の施設充実を計るために、同山荘周辺のランドの土盛りや、スキーグラウンドの植芝、遊歩道の造成などを実施してきた。



高見 清先生

藤岡前学長、高見教授 さようなら

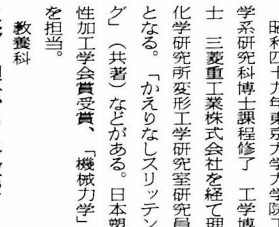
両先生退職される

去る三月三十一日をもって、前学長藤岡通夫先生と前教養科主任教授高見清先生が退職された。藤岡先生は昭和四十四年四月、東京工業大学教員養成所所長を経て本学建築学科教授に就任。同学科主任教授から四十八年三月、第三学長に就任。獅子奮迅のご活躍をされ、五十二年までの四年間、その要職を無事務めあげられた。同先生は、初代学長故小野健二氏に続き、本学では二人目の名誉教授の称号を与えられた。



藤岡 通夫先生

一方、高見先生は四十四年四月、教養科教授として就任。学生の教育に多大な尽力をされ、高見節といわれる独特の話し方で、学生を引きつけ、その懇切丁寧な指導法に定評があった。また、教養科主任教授の要職にあつて、教育・研究の発展に貢献された。別れを惜しんで多数の教職員が出席して行われた送別会では、両先生を引継ぎ、その懇切丁寧な指導法に定評があった。また、教養科主任教授の要職にあつて、教育・研究の発展に貢献された。



池田義雄教授



村上正夫講師



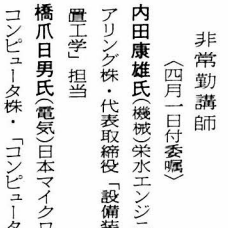
水野 担(ひろし)教授



鈴木敏正助手



和木敏一教授(教養)



塚林 功講師(同)



小高寿夫教授(機械)



須田泰敏氏(同)「解析学」担当



新藤邦昭氏(同)「独語」担当



原原 寛氏(同)保健体育担当



小高寿夫教授(機械)



和木敏一教授(教養)

見直し迫らる本学育英制度

四年間の大学生活のうちには、生は意外に多岐多岐な変化に会う。年令的にさういふ時期なのである。大学の教育と結果と信託にみちた関係が生まれることである。以上述べたように、大学における行動の明確な目的意識を持ち、学業第一に、余暇を有効に活用して自己形成に臨んで欲しい。



祝宴会場での両先生

昭和三十二年東京大学第二工学部物理工学科卒、株式会社本田技術研究所主任研究員、財団法人国

昭和三十二年東京大学大学院工学部研究科博士課程修了、工学博士、三菱重工株式会社を経て理化学研究所変形工学研究室研究員となる。「かえりなしスリッパ」(共著)などがある。日本塑性加工学会賞受賞、「機械力学」を担当。

昭和三十四年早稲田大学専攻科英語英文学専攻、早稲田実業学校教諭、五十年から本学非常勤講師。「英会話」ほか英語関係科目を担当。

昭和三十四年早稲田大学専攻科英語英文学専攻、早稲田実業学校教諭、五十年から本学非常勤講師。「英会話」ほか英語関係科目を担当。

昭和三十四年早稲田大学専攻科英語英文学専攻、早稲田実業学校教諭、五十年から本学非常勤講師。「英会話」ほか英語関係科目を担当。

新任教員の紹介

昭和三十四年早稲田大学専攻科英語英文学専攻、早稲田実業学校教諭、五十年から本学非常勤講師。「英会話」ほか英語関係科目を担当。

昭和三十四年早稲田大学専攻科英語英文学専攻、早稲田実業学校教諭、五十年から本学非常勤講師。「英会話」ほか英語関係科目を担当。

昭和三十四年早稲田大学専攻科英語英文学専攻、早稲田実業学校教諭、五十年から本学非常勤講師。「英会話」ほか英語関係科目を担当。

昭和三十四年早稲田大学専攻科英語英文学専攻、早稲田実業学校教諭、五十年から本学非常勤講師。「英会話」ほか英語関係科目を担当。

昭和三十四年早稲田大学専攻科英語英文学専攻、早稲田実業学校教諭、五十年から本学非常勤講師。「英会話」ほか英語関係科目を担当。

昭和三十四年早稲田大学専攻科英語英文学専攻、早稲田実業学校教諭、五十年から本学非常勤講師。「英会話」ほか英語関係科目を担当。

昭和三十四年早稲田大学専攻科英語英文学専攻、早稲田実業学校教諭、五十年から本学非常勤講師。「英会話」ほか英語関係科目を担当。



# 第九回卒業 六六九名、社会へ飛び立つ

## システム工学科から初の卒業生

第九回卒業証書授与式が、三月二十五日午前十時三十分から本学体育館で行われた。当日は、社会人となる卒業生を祝福するかのよう

式典は、在学生代表が持った校旗の入場によって始まった。その後、吉田衛学長が病欠欠席のため、学長代理の大川陽康教務部長から各学科の総代に卒業証書が手渡された。今回はシステム工学科から初めての卒業生を送り出すことになったが、同学科の総代が壇上に登



大川学長代理から卒業証書を受けるシステム工学科総代

同期生の卒業を祝い合う  
(機械工学科 卒業証書授与会場で)



た。校歌斉唱の後、拍手に送られるのを上げながら、どの頭も一期生としての誇りと喜びを満面にうかべながら、いっくん緊張をみみえたのが印象的だった。

卒業証書授与後、大川教務部長が学長告辞を読み上げ、「国際的視野に立つてものごとを考え、工業高等学校と日本工業大学で学んで得た技術をもとにして、これから大いに勉強して欲しい」と述べ、「本学の卒業生の特徴はフアイトと実行力のあるエンジニアであるので、この日本工大の伝統を伸ばし、後輩たちのためにも頑張ってもらいたい」と卒業生を激励した。

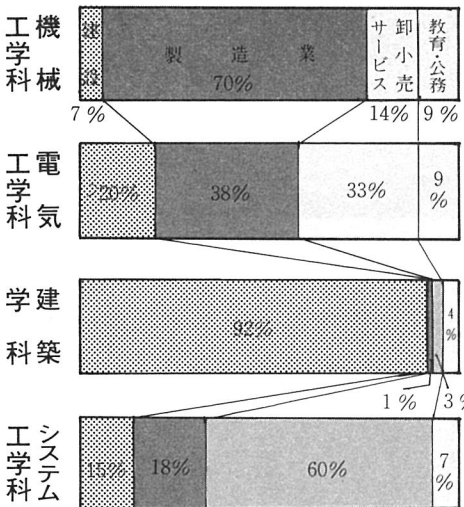
### 五十三年度就職概況

#### 厳しい中にも明るいきざし

昨年度の就職状況は、経済不安を反映してか、相変わらず厳しいものであった。このことは、低成長時代に完全に突入していること、あらゆる面で、企業側も人材確保に慎重な構えをみせていること、原因がいろいろある。また以前の労働集約型から「知識集約型」へと産業構造自体が質的変換を遂げてきていることから、サービス業等の第三次産業が大幅の上りてきており、その求人数も年々増加の一途をたどっている。今後とも求人業種は多様化していくことが予想されるので、求職者は正しい情報判断にもつき、よほどの努力をしない限り希望業種に就職することが困難となる。

しかし、昨年度の実績をみると時代には完全に突入していること、あらゆる面で、企業側も人材確保に慎重な構えをみせていること、原因がいろいろある。また以前の労働集約型から「知識集約型」へと産業構造自体が質的変換を遂げてきていることから、サービス業等の第三次産業が大幅の上りてきており、その求人数も年々増加の一途をたどっている。今後とも求人業種は多様化していくことが予想されるので、求職者は正しい情報判断にもつき、よほどの努力をしない限り希望業種に就職することが困難となる。

お互いの活躍を誓い合い 升酒で乾杯 (祝宴から)



### 学科別・産業別就職状況

## 四学科連合同窓会設立なる

同窓会は今年、新しくシステム工学科の卒業生を迎え、約四八〇〇名を超える会員を有する組織となった。

難産だった連合化 同窓会は今年、新しくシステム工学科の卒業生を迎え、約四八〇〇名を超える会員を有する組織となった。

同窓会事務局設置 同窓会は、連合同窓会の結成により、新しい時代に入った。常設の事務局を設け、パートの職員を置くことができ、また会費も大学側で学費と一緒に集めてもらえることになり、安定した運営が可能になった。だが、大学の創立年数が同程

記念事業計画進む さて微力ながらも動き出した同窓会の今後の課題は、連合同窓会の機能を十分に発揮すること、そのために各学科同窓会が運営体制の確立をはかり、共に発展していかなければならないことである。

すると、まず大きな事業として、同窓会設立記念事業がある。これは連合同窓会の設立を記念し、かつこれまで援助をして頂いた方々への感謝を表わすもので、五三・四年度の二年計画で今年度実施が昨年度の代議員会で議決された。これまで理事会等で話し合った結果、影響の奇蹟がほぼ決まり、今年度の代議員会の承認を得て実施される。予算約二百万円である。他に今年度は体育祭へ同窓会杯の寄贈や、大学祭への参加等新しい企画が予定されている。

## ファイトと実行力をもて

### 第九回卒業証書授与式 学長告辞

さて、四年の学業をなすおえ、いままた諸君の新しい旅立ちが始まるわけですが、諸君の胸にはさぞかし緊張感がみなぎっていること存じます。これからの人生は、今までの学業生活とは異なり、実際に自分の身を立てていく、実践の場において始まります。

さて、四年の学業をなすおえ、いままた諸君の新しい旅立ちが始まるわけですが、諸君の胸にはさぞかし緊張感がみなぎっていること存じます。これからの人生は、今までの学業生活とは異なり、実際に自分の身を立てていく、実践の場において始まります。

さて、四年の学業をなすおえ、いままた諸君の新しい旅立ちが始まるわけですが、諸君の胸にはさぞかし緊張感がみなぎっていること存じます。これからの人生は、今までの学業生活とは異なり、実際に自分の身を立てていく、実践の場において始まります。



# 研究室では①

## 応用力学研究室

鳥の骨に空を飛ぶたいという願いが飛行機をつくらした。人間は、動物からたくさんのお金を学んできた。十八世紀の産業革命以後、機械工学、人間工学の考え方が台頭してきたが、産業の高度化に伴って、また新たな問題が起き、自然と人間を合体して理解することが要求されている。

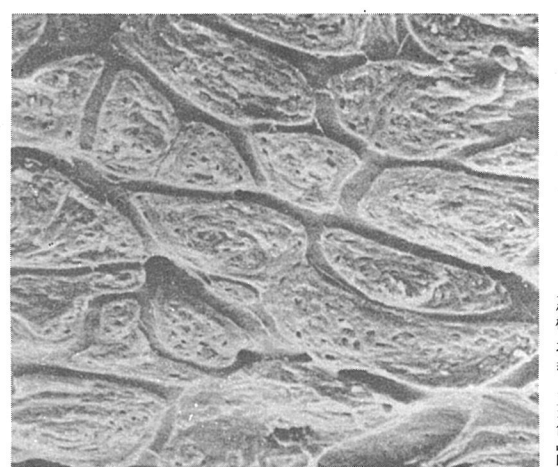
私の所属する機械工学は、産業革命と共に生まれた学問であるが、その後学問の分化に伴って、造船工学、航空工学、原子核工学などが分家していった。残った機械工学は、言わば、へこのめがけのようなものである。

のである。そして、もし、骨折やヒビ割れなどが起ると急いでその骨を修復する。人間の作った機械は使っている、ただだんだん消耗してしまいが、骨は適度に使用すれば、新しい骨ができて、ますます強くなる。使えば使うほど丈夫になる機械ができれば大発明だと思うが、そんなものはできなそう。

さて、骨の写真であるが、小さい頃、ガラスの容器に砂を入れて、アリの巣を削っていたことがある。そのアリの巣の穴の道とこの写真がそっくりなのである。しかも、アリの穴を掘ると骨の成長について、一日〇・〇四mmというゆっくりした速度で伸びて行く。血液による栄養供給とアリの食糧運搬を対比させると、その類似性は、いさゝか興味

深い。こうした自然界の不思議な符合には、秘められた何かがあるように思う。

研究室内の学生が大学の近くの



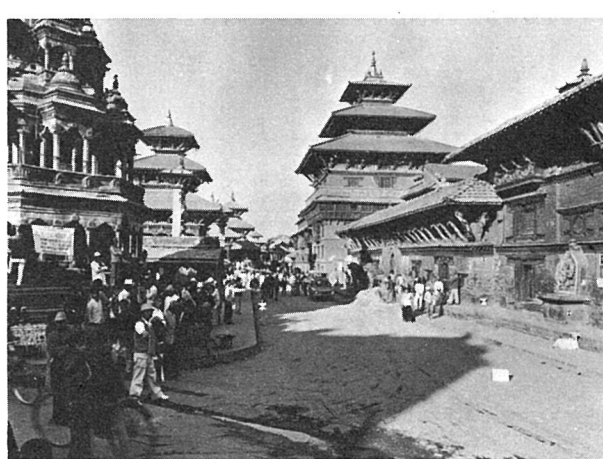
(機械工学科・玉井保講師)

肉壁でもらって骨を削り、磨いたり、引張ったりして、秘められた謎の手がかりを求める毎日である。

# 欧州研修旅行記

第八回欧州理工学研修旅行の一行三十七名が、箱崎エアーターミナルでの結団式を慌しく終え、リムジンバスに乗り込んだのは、暖冬の今年にしては珍しく、小雨降る肌寒い日の夕刻であった。

日航四三五便は、所謂、海外旅行の若者とは、やや趣を異にし、緊張気味の一行を乗せて、定刻の



パタンの古王宮前における調査状況

が、印象としてのヨーロッパへの第一歩はパリのドゴール空港に印された。乗継ぎの為の、五時間程の滞在であったが、ここで初めて外国の通貨を買い、外国語でのお茶を飲み、そして異国人の雑踏の中を歩いたのである。それがために、飲み、食わずのタンマリを飲み、スチーフデス嬢をキリキリ舞いさせ、挙句、彼女らと手ヤカリ記念写真に収まった強心臓も居た様である。

最初の目的地はローマであった



ダルムシュタット工科大学の学生食堂

に乘った学生が酒場で大声で歌うと、若いボーイが「まいった、まいった。これには、我々も全く参った。かくして疾風怒濤の如き二十日間の旅が始まったのである。

六、国語辞典を駆使して、やたらと道を尋ねる者。公園を探しては子供と遊ぶ者。路線図を頼りに地下鉄を乗り廻る者。若い女性と見るや、所構わず持参の絵ハガキを媒として接近を図る者、等々。いささか、彼等の旅行マナーはイタリヤ式に偏った嫌いはあったが、旅程の半ばを過ぎる頃には、ホテリに着くや否や、蜘蛛の子を散らす様に、姿を消す程に変貌を遂げたのである。研修という程良いフレキシカであった、この様な旅行において、彼らの得る所は、予想以上大きい感に思われる。

(機械工学科・柳沢章講師)

# ネパールの印象

## ネパール古王宮学術調査の報告



パタン古王宮における銘盤の転写

昨年十二月二十日から約三週間冬季休暇中に、ネパール王国(古王宮建築)の調査に出張した。「ネパール王国古王宮の研究と保存対策」をテーマにした研究を進めるためである。この調査を行うにあたっては、学術および大学の多くの方々準備段階からお世話になった。報告ははじめに、心からお礼申し上げたい。

調査は、藤岡通夫、波多野純

渡辺勝彦のほか、本学卒業生四人を含む計十人で行なった。この成果の学術的な報告は、調査が現在途中の段階にあるため、後のことになるとは、調査のとりあえずの報告をここにさせていた。

まず、調査を実施する前に国内において準備を進めた。ネパール政府から調査の承諾を得るため動き出し、川喜田二郎氏の口添えもあって今回の調査の承諾を、約一

年前に窓口となっていたネパールの「パタン」で「コミッション」から得ることができた。その後も、ネパールに到着しての情報を精力的に収集した。現地ホテルの建設にあたっては、ネパール語に研究に現地にいた人など、いずれもネパールに詳しい方へ行って情報求めた。しかし、私たちのように現地で建築を調べ、写真測量をしようとした例はなかった。したがって、例えば、現地の水で写真の現象が作れるだろうか(硬水では適さないと思われる)、ステレオカメラの足場が何らかの確保できないか、高価な測量用カメラを持ち込むが、税あるいは保証金はどうなるか、といったことなど、事前に十分な調査が必要であった。ところが、久し振りの英語や片言のネパール語で疲れたが、会話に少し慣れたのは収穫であった。

パタンの山々が見え、眼下にカトマンズの町を見たのは、すでに多難を辿った頃で、点々と見える町の燈が町の規模と雰囲気を示していた。

空港の建物は、地方の小さな空港といつた程度である。待合室で手荷物待機して二十分、飛行機から荷物が出てきた。荷物運びが入り乱れて、荷物が行き交い、自分たちのトランクを確保するのに苦労した。

たいへんである。税関吏のチェックが始まった。まず、グループで一括であることを係官に述べると、抜き取り検査になって、一つの鍵を求められた。一行の荷物は、トランクの中が調査のためのフィルムと現像用品などいっぱいである。フィルムがチェックされたが、学術調査の承諾証を示すと無事パスし、手荷物に関しては安心した。ところが、建物の外には、とにかく多くの人がいて、こちらをガラス越しのぞいている。ガラスにへばりついた目、そして目、異様な光景に少々落着かない。検査がパスとなったトランクの上に、一人が座って番をする。建物の外へ出るため、迎えにきた通訳を見つけて、ようやく、ホテルのマイクローパスに乗り込むことができた。

翌十二日、空港へ別送品を受け取りに行ったが、保証金として総額の三五%を要求された。しかし、折衝の結果、保証金に対する許可証があれば、大幅に免除されることとなった。

早速、考古局に向き、この旨を伝えて善処方を依頼した。すべの品物を調査が終わる次第持帰るとの誓約書を出されれば、許可ももらえるであろうと、不在の局長に面会するため後日改めて出向くことになり、二十四日のアポイントメントを取って宿に戻った。一日の多くの折衝の中で私たちが悩ませたのは、彼らが承諾の際に頭を縦に振って「日本なら頭を縦に振ってうなずくことこそ、私たちに否定に感じられることであった。

翌十三日は調査先の下見をする。この日、マイクローパスで出かけた。これら調査しようとするパタン・バダガオン町の歴史的背景は、圧倒されるほどの感動をもたらし、くれた。しかし、そのほかに「エキ・ルヒ(ルヒ)」と「ねだつてつきまとう子」も私たちには少々つまらない調査の実態にあたって障害にはならないかと心配であった。

二十四日は、予定通り考古局長タバ氏に会い、要請を受け入れられ、彼が税関局長へ手紙を書き、税関局から空港税関長へ指示が届いて保証金の件が解決し、その日のうちに無事ステレオカメラを受け取る事ができた。窓口となつた考古局のチーフ、アマティア博士はじめ官吏の敏達な仕事ぶり、は、「スタタリ」とは全く無縁のものであった。また、タバ氏は調査の将来にわたる進展を希望し、私たちに歓迎してくれた。そして「困ったことがあったら、いつでも来て下さい」と付け加えることを忘れなかった。

一方、町の人も、私たちが学術調査に携わってきたことを知るとたいへん協力的に接してくれた。寒測に何か手伝うことはないかと尋ねると、少年、撮影の人のために協力してくれる人、習った日本語で話しかけてくる若者、とにかく好意的な人々である。私たちの

(建築学科 渡辺勝彦助教授)



右はは同大のウルバノ教授